

企画展 「岡本秋暉 百花百鳥に挑んだ江戸の絵師」

—摘水軒コレクションを中心に

千葉市美術館 24.06.28～08.25

岡本秋暉（しゅうき）（1807～1862）は、江戸時代後期～末期に活躍した絵師で、孔雀を得意とし「若沖の鶏」「光起の鶉」「狙仙の猿」らと並んで「秋暉の孔雀」と評され、「山本琴谷」「福田半香」「鈴木鶯湖」と四大家と呼ばれた。

画風は、初期は長崎派の影響が強く、その後中国明代絵画、狩野派、円山・四条派などの古画を学び、写生に基づく鳥獣描写の工夫や華麗な画面構成の追及により、装飾的でありながら拡張高く重厚な作風を確立した画家である。

「秋暉」は、華麗な鳥画とりわけ孔雀を描いた作品で知られるが、懇意の小鳥店に頻繁に通って写生を重ねた逸話が残る程、鳥の描写を研ぎ澄ませ、鮮やかな色彩と緻密な描写による作品を制作したことで広く知られている。

今回、“孔雀の画家”「岡本秋暉」の18年ぶりの回顧展で、華麗な花鳥画など「約100件」の摘水軒コレクションを中心に画業を総覧できる催事である。

本展では、「江戸絵画縦横無尽！ 摘水軒コレクション名画展」を同時に開催、摘水軒コレクションは、肉筆浮世絵や花鳥・動物画など有数の江戸絵画コレクションを擁し、重要文化財である「岩佐又兵衛《弄玉仙図》、伊藤若沖《旭日松鶴図》など「100件」の作品が公開されている。



岡本秋暉	《白梅孔雀図》部分	1856年	絹本着色	一幅	左図
岡本秋暉	《名花双禽図》	1855年	絹本着色	一幅	中図
岡本秋暉	《百花百鳥図》部分	19世紀	絹本着色	一幅	右図